様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３４３０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１２４９３

研究課題名（和文）観光経験の哲学的分析及びその観光倫理教育への活用手法に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Fundamental Study on the Philosophical Analysis of Tourist Experience and Its Application to Tourism Ethics Education

研究代表者
原　一樹（Hara, Kazuki）

京都外国語大学・国際貢献学部・教授

研究者番号：９０４５４７８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、「観光者の観光経験の哲学的理解をいかに深めうるか、その成果をいかに観光倫理教育に導入できるか」という問題を探究した。1年目は主に観光者の「想像力」について、諸科学や哲学・文学を参照し解明した。2年目は観光倫理学の問題群を「観光開発現場での倫理学理論の活用、倫理的コード、観光者の倫理、観光教育における倫理の位置」の4領域に分け網羅的に整理した。また、スローツーリズムの観点から観光経験に関する哲学的考察を深めた。3年目は「善き生の探究としての観光哲学」の教育内容を、幾つかの根本的問いを軸に考察し整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、「観光者の観光経験の哲学的理解をいかに深めうるか、その成果をいかに観光倫理教育に導入できるか」という問題を探究した。観光者の「想像力」に関する哲学的理解の深化、観光倫理学が考察すべき問題群の明瞭化、コロナ後の潮流の1つでもあるスローツーリズムの現状や観光経験という観点からの意義の理解の深化、学修者に自己反省を促す「善き生の探究としての観光哲学」の教育内容の整理と構想、以上が本研究の主な成果である。これらの成果により、観光学や観光教育の哲学的な理論的基盤の整備が進んだ点に本研究の学術的意義が存在する。

研究成果の概要（英文）：This research delved into the complexities of deepening philosophical comprehension of tourist experiences and effectively integrating the findings into tourism ethics education. The first year focused on unraveling the concept of "imagination" among tourists, drawing insights from various disciplines, including philosophy and literature. The second year comprehensively organized tourism ethics issues into four domains: "Application of Ethical Theories in Tourism Development Sites," "Ethical Codes," "Tourist Ethics," and "The Role of Ethics in Tourism Education." Furthermore, the philosophical examination of tourist experiences was enriched from the perspective of slow tourism. In the third year, the educational content of "Tourism Philosophy as the Pursuit of the Good Life" was carefully examined and organized around several fundamental questions.

研究分野：観光学、哲学、倫理学

キーワード：観光経験　観光倫理学　想像力　スローツーリズム　観光教育　J.トライブ　哲学的実務家

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

2021 年に本研究を開始した当初は、世界はコロナ禍の中にあり、国際・国内観光が停滞する中で、再度、人類にとって旅や観光の持つ意義や価値の原理的な再検討が求められている状況にあった。UNWTO が「持続可能な観光開発」の加速を提唱し、観光者に対しては「責任ある観光者」像を提示するなど、様々な啓発事業を進めている状況もあった。

そのような状況を踏まえ、本研究は、持続可能な観光開発の重要性をもちろん認識しつつも、特に観光者に焦点を当てた場合、観光社会学の泰斗 D.MacCannell が“ moral ”（道徳）と“ ethics ”（倫理）とは異なると述べた通り（“ The Ethics of Sightseeing ”, 2011）、様々な道徳的行動規範を遵守するのみでは、観光者が充分に倫理的であるとは言い難い、即ち、観光者の持ちうる倫理的・創造的可能性が充分に発揮されているとは言い難いであろうと考えた。換言すれば、「責任ある観光者」の議論を支え補強するような、より根本的・原理的次元での観光者の倫理的・創造的あり方の探究と解明が要請されていると考えた。

他方、コロナ禍を経て、観光形態が更に個人化されたものに変容していく可能性も考えられた。このいわば「観光形態の脱近代化」の状況を踏まえ、観光者の精神のあり方も、より高次のものへと進展させる必要性があると考えられた。また、「高品質な観光」の推進が重視される状況も、研究開始当初から見られたが、「高品質」とは、経済的付加価値が高い観光や、持続可能性を配慮した観光のみを指す言葉ではなく、観光者一人一人が、己の観光経験の主観的・文化的質を向上させることも、「高品質」という言葉の含意とされる必要性があると本研究は考えた。これは社会的には、より質の高い観光経験を希求する観光者の育成が必要な時代に入ったことを意味していた。観光教育という観点からは、観光学者 J.Tribe の提唱する「哲学的実務家」育成のための教育枠組みを踏まえつつ、大学教育の中に、観光者の観光経験に関する哲学的理解についての学修を観光現象の具体的文脈と接続しつつ導入し、観光倫理教育の一つの支柱とすることが求められていた。

２．研究の目的

本研究では、以上の背景を踏まえ、その育成の必要性が提唱されている「責任ある観光者」の哲学的基盤を提供するために、観光を行う際の観光者の精神活動に関する原理的理解を深めることを目的とした。合わせて、その知見をいかに観光倫理教育に導入するかも研究目的とした。本研究の核心を為す学術的問いは、「観光者の観光経験の哲学的理解をいかに深めることができるか、また、その成果をいかに適切に観光倫理教育に導入することができるか」と定式化された。

３．研究の方法

上記の研究目的を達成するため、本研究では具体的に、観光者の想像力や知覚・感覚などの観光経験のあり方、及びそれらに関する知見の観光倫理教育への組み込み方を検討した。その際の学術的独自性の一つとしては、本来的に領域横断的思考である哲学の特性を活用し、観光学に関わる各種先行理論（観光社会学・観光人類学・観光地理学等）に加え、哲学（哲学史）・倫理学・文学等の人文知を広く観光経験の分析に援用した点が挙げられる。これにより、観光現象に関わる人間精神の働きに関して、概念的緻密さ・歴史的深み・空間的広がりを持つ哲学的理解を与えることが可能となった点が方法論的特徴である。

４．研究成果

本研究は、「観光経験の哲学的分析及びその観光倫理教育への活用手法に関する基礎的研究」と題し、3 か年の計画で、「観光者の観光経験の哲学的理解をいかに深めることができるか、また、その成果をいかに適切に観光倫理教育に導入することができるか」という問題を解明するものであった。

研究１年目である 2021 年度は、以下の研究を遂行した。

１つ目の研究として、観光学・哲学・文学の様々な理論や言説（マキァーネル、サルトル、ニーチェ、東浩紀らの言説）を参照し、プレツアー、オンツアー、ポストツアーにおける人間の「想像力」の作用について考察を深め、「観光経験における＜想像力＞の役割に関する哲学的考察―包括的探究に向けた論点の整理―」と題し口頭発表を行った。

プレツアーにおける観光者の想像力のあり方については、観光学者マキァーネルや哲学者ド・ボトンが指摘するような不完全性や偏向性が見られるものの、現代社会の観光者は更に自らの想像力の限界をメタ的に自覚しつつ観光地への欲望を組織化している可能性について指摘した。更に、哲学や文学の言説を参照しつつ、目的を持たない放浪や漂泊に対する欲望の存在、ノスタルジーに浸るなどの想像力を働かせること自体を目的として始まる旅の形の存在も合わせて指摘した。

オンツアーにおける想像力のあり方については、人間が五感を通して対象を経験する際に、常に想像力が他の心的作用と関わりを持つ点を確認した上で、旅先で知覚全般が研ぎ澄まされる事態を踏まえ、旅先でのより良い知覚とはいかなるものかについて考察した。この点につき、旅先で偶然出会うものを言葉で表現し創造することの重要性を指摘するマキァーネルの議論や、

旅先で出会う事物から連想・想起・思考が喚起される事態に関し、哲学者ニーチェや評論家・福田恒存の言説等を通して理解を深めた。
　ポストツアーにおける想像力のあり方については、観光を通した観光者自身の主体性の変容や欲望の再編成を考察したマキァーネルや東浩紀の言説を検討した上で、想像力を働かせつつ観光経験を他者に対して語ることを通して、多様性を受容する精神の豊かさや、創造的想像力の育成という成果に至りうる点を指摘した。加えて、観光を通した他者への態度変容の問題について、観光を通した「寛容」や「コスモポリタニズム」の精神の育成の可能性に関する議論状況を整理した。今後の課題として「想像力の生産物（言説・写真・動画等）」の流通回路の問題と、「想像力と創造力」との接続の問題が提示された。
　2 つ目の研究として、観光における人間の知覚や感情について、コロナ後の観光において重要となりつつある、「遅さ（スローネス）」や「経験に時間をかけること」という観点に注目し、「スローツーリズム」の定義・概念や事例、国内外の現状や課題を考察し、「モビリティ・ジャスティスとスローツーリズム－日本における現状把握と展望」と題したシンポジウム発表を行った。
　3 つ目の研究として、観光経験の哲学的分析の観光倫理教育への導入の問題について、観光学者 Tribe の観光教育の枠組みや、価値教育を主唱する TEFI(Tourism Education Futures Initiative)の枠組みにおける哲学や倫理学の占めうる位置について検討し、「観光倫理への倫理学諸理論の導入―現状と課題」と題した口頭発表の一部に組み込んだ。

　研究 2 年目である 2022 年度は、以下の研究を遂行した。
　1 つ目の研究として、「観光倫理研究の現状と課題―英語圏の先行研究と自然・人間・社会の複雑さを踏まえて」と題した論文を発表した。この論文は、「観光開発の現場での倫理学理論の活用、倫理的コード、観光者の倫理、観光教育の枠組みにおける倫理の位置」という 4 つのテーマにつき、英語圏の先行研究を踏まえつつ、それらが現代における「自然・社会・人間」概念の複雑さを十分に組み込めていない点を指摘した上で、今後解明が目指される問題群を網羅的に提示したものである。以下がそれらの問題群である。

＜観光開発現場での倫理学理論の活用＞に関する問題群
　1）倫理学理論の統合的かつ精密な活用
　2）倫理学的分析ツールの標準化と普及・研修機会の提供
　3）内在的価値を持つ存在としての自然や動物の定位
　4）倫理学理論における人間像の再検討
　5）倫理学的分析ツールの社会的普及に関する ANT を用いた研究
＜倫理的コード＞に関する問題群
　1）良い倫理的コードの定義
　2）コードの作られ方と効果測定
　3）倫理的コードが人間の道徳的行動に対して持つ影響力
　4）ローカルな倫理的コードが採用する自然観
　5）倫理的コードの遵守行動・違背行動と関係者のあり方
　6）日本での観光分野におけるナッジの活用
　7）コードの作られ方と普及に関する ANT を用いた研究
＜観光者の倫理＞に関する問題群
　1）有徳な観光者になるための学習や訓練
　2）有徳な観光者としての自己形成と他者への責任ある行動との関係
　3）観光者と自然や動物との出会いにおける想像力・創造力
　　（ドゥルーズ＝ガタリ哲学の「動物への生成変化」との関係性）
　4）観光を通した芸術創造教育と徳の涵養
　5）「第 2 の観光者のまなざし」を生み出す欲望の由来
　　（ドゥルーズ＝ガタリ哲学の欲望理論・社会理論との関係性）
　6）観光と寛容の精神やコスモポリタンの倫理の涵養との関係性
＜観光教育における倫理の位置＞に関する問題群
　1）「自由な反省」領域と「自由な行動」領域の統合の形
　2）「スチュワードシップ」における観光倫理と環境倫理との関係性
　3）「倫理」における、学修目標・内容・方法論の精緻化
　4）「自由な行動」と「倫理」に関わる自然観の問い直し
　5）観光教育と教養教育・人文知に関する教育との関係性
　　（人間の本質や自己に関する反省機会の創出）
　6）アジャンスマン理論を用いた教室空間・教育実践の分析

　2 つ目の研究として、「スローツーリズムに関する基礎的研究―スロー運動との関係性および定義・現状・展望―」と題した論文を発表した。この論文は、哲学的・倫理学的観点からも注目されるスロー運動やスローツーリズムという現象について、国内外の理論・実践状況を踏まえ、その現状と課題を分析したものである。
　本論文では最初に、近代社会による速度や効率性重視への批判的実践である、スローフード運

動やスローシティ運動の概要や状況を踏まえた後、スロー運動の主要契機として、「時間・空間・経験・倫理」という 4 つの概念に注目し、その内実を考察した。その上で、スロー運動との関わりを念頭に置きつつ、スローツーリズムやスローツーリストに関する定義、日本におけるスローツーリズムの現状に関する理解を深めた。最後に、「自然環境への関心や配慮と交通手段の選択」、及び、「経験の質と倫理」という 2 つの観点からの考察を行い、スローツーリズムの今後の展望や課題を抽出した。前者の観点については、旅行者の価値観や行動基準、環境・交通政策、旅行サービスの提供構造の 3 点に関わる変化を継続的に観察することの必要性が明らかとなった。後者の観点については、「質の高い経験」の含意を理解した上で観光経験を提供する必要性があること、及び、「モビリティ・ジャスティス」の理論と関連させ、スローツーリズムの倫理的意義を考察する必要性があることの認識に到達した。

1 年目・2 年目の研究により、観光経験に関する哲学的理解が深められ、観光倫理学全般の問題群が明瞭化されたことにより、観光倫理教育が含むべき内容や問題群も明らかとなった。これらを踏まえ研究 3 年目は、特に観光経験の哲学的理解をいかに観光倫理教育に導入するかという問題に関し、研究を進めた。

この研究成果については、「＜善き生の探究としての観光哲学＞の教育内容に関する考察―J.トライブの理論を踏まえて―」と題し、口頭発表を行った。本発表により、観光倫理教育において、諸事象の「根拠や理由」・「過程やあり方」・「意味や価値」・「課題や可能性」の 4 つの観点から、自己と観光との関わりについて、多分野の知見を活用し哲学的に反省を深めることの重要性が明らかになった。

「根拠や理由への問い」では、「私の観光への欲望はどこから来ているか、なぜ私は観光への欲望を持つのか」という問いが中心となる。関連する観光経験の基本概念である「想像力・欲望」について考察を深める素材として、観光の動機を巡る諸理論や、観光学者・マキァーネルの「観光の倫理」の理論、古今東西の様々な文学作品に記述された、作家達による「旅の動機」を巡る言説などが活用できることが明らかとなった。

「過程やあり方への問い」では、「私の観光行動を可能にしている条件や構造は何か」という問いが中心となる。関連する観光経験の基本概念である「知覚・感情・記憶・理解」について考察を深める素材として、観光社会学等の諸理論に加え、哲学者・ボトンの著作『旅する哲学』や、思想家・川上源太郎の著作『旅の思想』等、人文知の諸言説を広く活用できることが明らかとなった。

「意味や価値への問い」では、「私にとって観光はどのような意味や価値を持つ行動か」という問いが中心となる。関連する観光経験の基本概念である「アイデンティティ・偶然の出会い・自己変容」について考察を深める素材として、マキァーネルの「第 2 の観光のまなざし」の理論や、哲学者・ニーチェや東浩紀などの人文知の諸言説を広く活用できることが明らかとなった。

「課題や可能性への問い」では、「私にとって観光はどのような課題や可能性を持ちうる行動か」という問いが中心となる。関連する観光経験の基本概念である「価値創造・倫理」について考察を深める素材として、持続可能な観光や観光倫理に関する諸理論、ボトンやニーチェ等の哲学者の言説が活用できることが明らかとなった。

以上を踏まえ、今後の課題として、観光哲学の教育素材として活用できる多分野にわたる知的資源の更なる充実と教育手法の洗練の問題、及び、「自己の生の吟味」としての観光哲学の営みを、他の学修内容や学修者のキャリア形成等のより広い文脈にどう接続するかという問題が存在することが指摘された。

以上の 3 ヵ年の研究により、「観光者の観光経験の哲学的理解をいかに深めることができるか、また、その成果をいかに適切に観光倫理教育に導入することができるか」という、本研究が中心的問いとして掲げる問題の解明を着実に進めることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 原一樹	４．巻 10－2
２．論文標題 観光倫理研究の現状と課題―英語圏の先行研究と自然・人間・社会の複雑さを踏まえて	５．発行年 2022年
３．雑誌名 観光学評論	６．最初と最後の頁 113－129
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 原一樹	４．巻 134
２．論文標題 スローツーリズムに関する基礎的研究：スロー運動との関係性および定義・現状・展望―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	６．最初と最後の頁 149－182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00018074	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 原　一樹	４．巻 1
２．論文標題 アクターネットワーク理論を活用した観光研究に向けての準備的考察 ： 概念的明瞭化と方法論の検討	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Ignis	６．最初と最後の頁 81-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 原　一樹
２．発表標題 観光経験における「想像力」の役割に関する哲学的考察 ―包括的探究に向けた論点の整理―
３．学会等名 日本観光研究学会 第36回全国大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 原　一樹
２．発表標題 モビリティ・ジャスティスとスローツーリズム －日本における現状把握と展望
３．学会等名 ツーリズム・モビリティーズを問い直す ――COVID-19以後の モビリティ・ジャスティスとは何か（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 原　一樹
２．発表標題 観光倫理への倫理学諸理論の導入―現状と課題
３．学会等名 観光学術学会第9回研究集会（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://kufs.repo.nii.ac.jp/index.php?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_snippet&index_id=79&pn=1&count=20&order=17&lang=japanese&page_id=38&block_id=50

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関